

2019年1月6日（日）

主 題：「ほんとうの信仰とは？」

ーバランス性を保つー

テキスト：ヤコブの手紙 2章14節

はじめに

- ・2019年、新しい年を迎えました。そして本日、新年礼拝を愛する兄弟姉妹と共に持つことがきる幸いに感謝します。

今日、与えられたみことばはヤコブの手紙2章14節です。

2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

1) 私はこの聖句を読み、グサリと心が刺されました。

皆さんは、いかがでしょうか。自分の「信仰」に、「行い」が伴っているだろうか、ということ。正直言って、その答えは、「No!」です。では、行いが信仰に伴っていない牧師が、講壇で神のことばである聖書を説き明かす資格があるのだろうかと思うと、神の前に偽善者ではないかと心が痛み悩みました……。

- ・しかし、心静めてこの聖句を読んでいますと、ヤコブが言っていることは、その意味（資格の有無）ではないことが教えられました。**これは修辭的疑問文というものです。つまり「No」という答えを想定した質問だということです。**たしかに、牧師でなくてもこの質問に対して、誰一人、「Yes」と答える人はいません。信仰と行いが、完全に一致する人はいないからです。
- ・人間は、他人の姿はよく見えます。しかし、自分の姿は見えません。ですから、「信仰」と「行い」のバランスに欠けている人がいると、容易に指差しをしてしまいます。これが問題となり、お互いの関係が崩れてしまうこととなります。では、なぜ、ヤコブはこの「No」という返答になる修辭的疑問文を投げかけたのでしょうか。これが、私の第一の疑問点です。

2) もうひとつ、この聖句で疑問をいただくことがあります。

それは、パウロは「人は信仰により、恵みによって救われる」と主張していることです。どれだけ律法を守ったとしても（事実、守れないが）、人は律法によって救われないと説きました。たしかに私たちも、救いは恵みであり、行いではないと信じています。

- ・しかしヤコブはここで、「信仰に行いがないなら、まったく役に立たない。」（ドイツ語訳聖書では、死んだものである）と語っています。
- ・皆さん！ パウロとヤコブの主張には、矛盾があると思いませんか。

皆さんは、どう思われるでしょうか。今日の聖句は、信仰に潰れてしまいやすい私たちにとって、襟を正して聴かなければならない聖句です。今朝私たちは、この2点について考えてみたいと思います。

大切なポイント

1. 信仰の原則

1) 信仰とは

- ・ヤコブは次のように言いました。

1:22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはけません。

そして次のように言いました。

2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

- ・ある牧師が、信仰は大きく分けると2つの内容に分けられると言いました。

① 「信じる」ということ

まことの神はおひとりであると信じること、神の存在を信じるということ、神は愛のお方であるということ、神は力あるお方であるということ。これらを信じることは、みな信仰であります。大事なことです。

② 「信頼する」ということ

ただ、神の存在を信じるというだけでなく、そうであるがゆえに、私の存在も、生涯も、信じている神にすべて委ねるということです。子どもが、「この人は私の親である」と信じることと、その親に信頼することとは違います。

- ・ギリシャ語で「信仰」は、“pisteuein”（ドイツ語読みでピストイアイン）です。

それは「だれか（人）を信頼すること」を意味します。つまり、パーソナルな関係（人と人との関係）があることです。信仰をそのようにとらえると、イエスの言われたことばが迫ってきました。

- ・15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。ヨハネ
イエスはこのたとえ話で、ぶどうの木と枝の関係、そこには繋がりがあ、命があり、実が実ると言われました。またパウロは次のように言いました。2:7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を
堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。コロサイ

- ・信仰とはパーソナルな関係で信じ、そして信頼することです。

2) ほんとうの信仰とは

- ・それでは、「ほんとうの信仰」とは、どんな信仰でしょうか。

ヤコブは次のように言いました。

2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないな

ら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

- 一方、パウロは次のように言いました。ローマ人への手紙

3:20 なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

3:28 人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

皆さんは、この二つの主張に、違和感を覚えられないでしょうか。

- パウロがこのように教えた背景には、当時のユダヤ主義クリスチャンがいたことを知る必要があります。ユダヤ主義クリスチャンとは、ユダヤ人が最も重要と考える律法を守ることを主張した人たちです。それは「割礼」でした。

当時、割礼はユダヤ人にとって、命の問題でした。神が彼らの父祖アブラハムに命じられた絶対的命題でした。割礼を受けない人は、ユダヤ社会から断たれてしまいました。

- ですから、ユダヤ人たちはクリスチャンになっても割礼を止めることができませんでした。当時のキリスト教社会は、この割礼問題で二分したのでした。つまり、

① 割礼を受けなければならぬと主張したユダヤ主義クリスチャンと

② 信仰だけで救われるのだから、割礼の有無は問題ではないと主張した人たちでした。

- この割礼問題は次第にエスカレートしていき、大問題となりました。キリスト教の歴史で初めての、重要な会議が開かれました。この会議が「エルサレム会議」（教会会議）と呼ばれるもので、信仰とはどういうものかを定義づけたものです。それはAD 49年のことで、使徒の働き15章に記録されています（お読みください）。会議結果は、割礼の有無が救いの条件ではないというものです。これが、新約聖書が、私たちに教えてくれるメッセージであります。

ガラテヤ人への手紙には次のように書かれています。

5:6 キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。

- このように、パウロはユダヤ主義クリスチャンが多かった時代に、救いは信仰のよるものであることを説きました。
- ところがです。今度は恵みによって救われ、信仰に与った聖徒たちは、日常生活で信仰者としてふさわしくないものが現れてきたのでした。そこで、ヤコブは「行いのない信仰は、死んだようなものだ。」と説いたのでした。

3) パウロとヤコブの立場の違い

- ここで少しまとめてみましょう。つまり、パウロは信仰の「救いの方法」について、ヤコブは「救われた証拠」について論じたのでした。パウロはユダヤ主義クリスチャンと戦っていました。ヤコブは無律法主義者と戦っていました。
- ですから両者は矛盾しているわけではありません。むしろ、補完し合っているのです。私たちは信仰により、恵みによって救われます。これは真理です。と同時に、真の信仰には愛の「行い」が伴うものです。これもまた真理です。

- ・イエスは山上の垂訓（マタイ7：21ー27）で、信じることの大切さと同時に、信仰に基づく大切さも教えられました。
- ・ヤコブは「私の兄弟たち」と呼びかけています。兄弟とは家族の一員であり、愛のゆえに「キリストにある人はこのように歩んでほしい。こう歩むべきなのだ。」という思いが溢れて出ているのです。ヤコブは決して、厳しい教訓を押し付けているのではありません。
- ・ですから、パウロの教えることも、ヤコブが教えることも、両方とも正しいことでした。ここで大きな課題となるのは、ヤコブが語る「信仰」と「行い」とのバランスであります。

2. 行いと信仰のバランス

1) クリスマン・ライフ

- ・ユダヤ人も異邦人も、ただ神の恵みによって救われます。律法という行いではありません。しかし、恵みによって天国行きのチケットを入手したことに甘えてしまい、クリスマン生活に注意を払わない人が現れてきました（私がよく言う恵みズレですね）。
- ・これは今の時代でも、言えることでしょう。「あの人がクリスマンですか？ 信じられません！ あの人がクリスマンなら、私はクリスマンにはなりません！」等と。本当に残念ですが、現実にもそのような問題があることは事実です。信仰と行いのバランスに欠けるのです。
- ・一方、「あなたの言動に心惹かれて、クリスマンになりたい。」という方もいます。これは、とても素晴らしい証しです。そのようなバランスがとれた生き方をしている方に、私は敬意を覚えます。しかし、自分に当てはめるならば、それはほんとうに難しい課題でもあります。
- ・いかがでしょうか。私たちはどんな生活を送っているのでしょうか。

2) クリスマン・ライフの実践

- ・ここで問われることは、どうすれば「行い」と「信仰」のバランスがとれるかということです。私たちは、その両方が大変重要であることは分かります。しかし、問題はそのバランスが取れないことです。
- ・「信仰」と「行い」は、いわば車の両輪のようです。信仰生活は一輪車では成り立ちません。なんでもそうですが、2つの車輪のバランスがどのようにとれるかです。バランスがとれるとは、二つの対照的なものがこの私の中にあるということです。
- ・ひとつしかない時、それは「偏っている」と言えましょう。偏りには問題があります。だからと言って、二つのものの中道の道に行くことでもありません。それは「半端」ということになります。一見すると、相反するように見える二つのものが、その人の中で一緒になっていること、これが「バランスが取れている」ということです。ですから「信仰」と「行い」、そのどちらも、私たちの生活において大切です。
- ・私は「信仰」と「行い」を自分に向けてみました。正直に自分を振り返ってみれば、私が神を信じたのは14歳でした。自分の内に罪がある

ことがはっきりと知らされ、涙を流して悔い改めの祈りを捧げてことを思い出します。

- そのスタート（行いではなく、信仰）によって、私のクリスチャンとしての人生が始まりました。それは恵みでした。しかし、ヤコブの言う信仰の「行い」を見せるよう言われると、脱帽せざるを得ません。なぜなら、まだまだ不足が多いからです。
- そこで、どうすれば「信仰」と「行い」のバランスがとれるかと祈り求めると、次のように導かれました。

① 聖書が教える生き方を知る

- 問題は自分が見えないところにあります。人は自分が見えないものです。自分を見る唯一の方法は、鏡の前に出ることです。ドイツの宗教改革者マルチン・ルターは、「聖書は心の鏡である。」と言いました。全身を映し出す鏡の前に出ることです。問題は、鏡（聖書）の前に出ることなく、人を見てしまうところにあります。これは私に言われていることです。
- このように聖書を開き、神のみことばを読むと、自分の姿が自然に映し出されてきました。自分は何と不足の多いものか、みことばが私の姿を映し出してくださいました。しかし、そんな不足いっぱい私を、神は恵みによって、信仰によってお救いくださいました。それが鮮明化されてくると、今度は神への感謝の心に包まれるようになりました。
- そして、神が喜ばれる生き方はどのようなものかと求めるようになりました。神の本性の一つは義です。神は不正を喜ばず、真理を喜ばれるお方です。神の前に二重人格者として生きるのではなく、素直に生きることが教えられました。すると不思議にも、肩の力がスッと降りたような感覚になりました。そうだ！ 頑張るという生活ではなく、素直（正直）に生きることが大切であると教えられたのでした。本当に感謝です。
- そして、さらに聖書を読むと、信仰の先人たちの生き方も知ることができました。信仰の先人たちを通して、神の前に、バランスがとれた生き方を学べることが分かりました。

『例 話』

私は、「ホワイトハウスを祈りの家にした大統領アブラハム・リンカーという本を読みました。大変、励まされました。神を畏れ、神の前に正直に生きたリンカーン大統領から多くのことを学びました。歴代大統領で最も尊敬される大統領は、今もアブラハム・リンカーン大統領と言われています。

- そのリンカーン大統領に影響を与えた書物は、聖書でした。彼は「私が一番好きな友だちは本を贈ってくれる人だ。」と言いました。リンカーン大統領の「信仰」と「行い」、そのバランス性の秘訣は聖書から来ていることを知り、ほんとうに励まされました。なぜなら、私も同じ聖書を持ち、生き方を学ぶことができるからです。そしてリンカーン大統領が信じた同じ神を、私も信じるものであるからです。
- 「聖書は心の鏡である。」ことを再確認させていただきました。

② もうひとりの助け主

- 人の評価、判断はそれぞれ違います。しかし神は義である方ですから、神が私の人生に介入してくださる時、大きな影響を受けます。神は霊なるお方で、私

に迫ってくださる時、それは聖霊として介入してくださいます。イエスは次のように言われました。ヨハネ福音書

14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

- ・ 神の御霊（聖霊）が介入してくださり、私の人生の旅路を先導くださるならば、生活が変えられます。未完成なものが、整えられ「信仰」と「行い」のバランス性が整えられてきます。それは実に幸いな信仰生活です。これこそ、私の願いです。
- ・ ですから、「信仰」と「行い」のバランスをとろうとして、自力に頼るのではありません。私たちの人生は頑張りで、完成できるものでもありません。自分の力で、信仰生活のバランスを計ろうとするのではなく、「もうひとりの助け主」（聖霊）の助けをいただいて、歩むことです。私はここに希望を持っています。なぜなら、自力で「信仰」と「行い」のバランスが取れないことを、私が一番知っているからです。
- ・ 皆さんは、いかがでしょうか。2019年、私たちの信仰生活において「信仰」と「行い」にバランスが取れるように、させていただこうではありませんか。

まとめ

主 題：「ほんとうの信仰とは？」
—バランス性を保つ—

2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

- ・ 今日、私たちは信仰生活で大切なことを学びました。それは「信仰」と「行い」のバランス性です。パウロもヤコブも、それぞれ強調点がありましたが、それは互いに補完するものです。私は信仰者としてバランス性を保つため、次の点を教えられました。
1. 神のみことばを知ること
 2. 「もうひとりの助け主」と歩むこと

* God bless you!